
別に何も始まらない冒険

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別に何も始まらない冒険

【Nコード】

N8583Z

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

一人の少女の魔王を倒す旅が始まる……………と思っただけでも無く。

……………てかそもそも魔王は悪い事とかしてない世界だった。

どっちかと言えば、ほんのりなお話し。

ぶるーぐ

フワリ村：ここは名のとおり平和な村。

ここに勇者を夢見る一人の少女がいた。

そしてその少女は魔王を倒す旅に出るために村長に旅に出る許可をもらいに来ていた。

「村長！魔王を倒すための旅に出る許可をください！」

「別にいいよ？」

村長は鼻をほじりながら少女に軽く旅立ちの許可を出した。

少女は村長が余りにも軽いノリで旅立ちの許可を出すものだから激しく動揺する。

「え、え、え、えー！ー！！？そんなに軽いノリで許可を出していいんですかぁ！！？」

「何だよ。旅、行きたくねーのかよ？」

村長は少女の反応に面倒くさそうにしながら鼻毛をちぎろうとしながらそう言った。

「いや、行きたく無いわけじゃないですけど。…普通は村のかわいい女の子が旅に行こうとしたら止めるもんじゃないですか？」

「かわいい女の子？んなの何処にいいんの？」

村長はモテる百の方法と言う本を読み始めながら少女にそう言った。

村長の言葉に少女は額に青筋を浮かべながら頬をひくつかせていた。

「村長、私に喧嘩売ってるんですか？…てか何て本を読んでんですか！」

「うるせーな。モテたいと思って悪いのかよ？」

そう言いながら村長は鏡を見て自分の数少ない髪をかつこよく整えようとしていた。

少女は、もう村長の相手をするのが嫌になったので村長の家を出て旅に行く…前に村長にある事をお願いする。

「旅立ちの資金ください。」

「ヤダよ。バーカ。」

村長は少女の願いをあつさり蹴った。少女は村長があつさり自分の要求を断ったので自分の背に背負っていた剣を引き抜き村長に向けた。

「いいから資金くださいよ村長？」

「オメーそれプラスチックの剣だろ？そんなんでもしを脅せると思ってるの？」

村長は剣を向けられ脅されるがプラスチック製と分かったのでビビらなかった。だが少女は『ふっ』と不適に笑う。

「甘いですよ。村長、私はプラスチック製の剣で岩を真っ二つに出るんですよ！」

自信満々にそう少女は言う。だが村長は、そんな少女の自信満々の態度を鼻で笑った。

「バカじゃねーのお前？プラスチック製の剣で岩が斬れるわけねーじゃん？」

村長は少女を明らかに見下した目をしてそう言った。少女は村長のそんな態度を見ると村長が自分を異常なほど美化して作った銅像に近づき。

スパンツ

真つ二つ斬り裂いた。村長は少女が銅像を真つ二つにしたのを見ると同時に玄関に向かってダッシュして逃げようとしていたが。

ヒュッ カッ

少女がテーブルに置いていたフルーツナイフを投げてきたので村長はビビって動きを止めた。

「ダメですよ。村長、私に資金も渡さないでお出かけしちゃ？」

「幾らいるんすか？」

村長は少女が結構ヤベエ事してくるのでお金を渡す事を決めた。村長が幾らいると聞くと少女は指を五本たてた。

「五ゴールド？」

「五万ゴールドです。」

少女はキツパリとそう言った。村長は財布をまさぐると五万ゴールドをちゃんと少女に渡した。少女はお金を受けとるにつこり笑いながら剣を鞘に納めた。

「じゃ、行ってきます!」

少女は、そう言つと村長の家を出て旅に出るのだった。少女が家から出て行くのを見ると村長は怒りを込めながらこつ叫ぶ。

「二度と村に帰ってくんなバツキャローが!!」

しかしその叫びが少女に届かないのは言うまでも無い。

広い大草原。少女はそこに立ちこつ思う。

（私の魔王を倒す旅が始まるんだ。……………で魔王つて何処にいるんだっけ？）

……………少女の魔王を倒す旅は始まる？

だいいちわ まほうつかいがなかまになった（前書き）

なかまがたいとるどおりふえるよ！

だいいちわ まほうつかいがなかまになった

私、シャーユリブレイブは今、ジマーハの町にきています。えっ？
名前急に言っくなよって？別にいいじゃんどこでも。

……そんな事より私がこの町にきた理由は魔法使いを仲間にするためなのだ！旅に魔法は必要だからね！

……えっ？お前は勇者だから魔法あんじゃねーかって？

……私は魔法使えないタイプの勇者なんだよチクショー！！

「嬢ちゃん、なに一人でぶつぶつ言ってるんだい？」

「何でもありません。」

やべー…変人扱いされるところだった…。

それよりもとっとと強そうな魔法使い探すか。

仲間探しと言ったら……。

「やっぱり酒場だよね！」

私、未成年だけど仲間探すだけだし入ってもいいよね？

……てかもう入っちゃてるけど……。

「強い魔法使いは私の仲間になってね」

私はウインクをしながらそう言った。

私のかわいいウインクで仲間にならない奴は感性が腐ってるね！

シャージュはそう思っているが実際はテメーのウィンクごときで仲間になる奴が感性が腐ってる。
酒場の人達は皆、うわっ…なんだこいつとまともな反応をしてくれている。

「あれ？……全然仲間になりに来ないよ……感性腐ってんのかためーらあ！！」

シャージュがそう怒鳴っても酒場の人達は怒るところが無視。
まあ、こいつは相手にするだけ面倒くさいと感じたんだろう。

「チクシヨー！無視が一番酷い、いじめなんだぞ！お前らそれやって恥ずかしくないのかよう！！」

じゃあテメーの感性腐ってる発言はどうなんだよ？
酒場の人達はきつと皆そう思ったに違いないな。

「ねえ、強い魔法使い教えてよ。」

「知らねえよ！？」

シャージュは酒飲んでるおっさんの服を掴んでひっぱりながら強い魔法使いの事を聞く。
おっさんは凄く迷惑そうな顔をしてる。

「きつと魔法使いが仲間になりに来ないのは酒場にいないからなん
で強い魔法使いの居場所を教えろよ。」

「知らねえって言うてんじゃん！？…といか仲間になりに来ないの
はお前の態度の問……」

ガンッ！

シャージュはプラスチックの剣を鞘から抜くとおっさんを殴りつけた。
おっさんは目にお星さまを浮かべている。

「ちっ……他に魔法使いの居場所とか知っている人はいませんか
？」

シャージュは口だけ笑って、目は全く笑っていない顔でそう酒場の人
達に言った。

すると酒場の人達の一人が手をあげた。
恐怖から早く解放されたいんだな……。

「大魔法使いがマジマジの森にいと聞いたことが……。」

「本当！じゃあさっそくマジマジの森へ！」

シャーユはそう言うとマジマジの森に向かって行った。

そしてシャーユはマジマジの森にたどり着く。

「絶体、森の奥にいるような大魔法使い……モンスターどうしよう……逃げまくればいいか！」

シャーユは超ヘタレ勇者の称号を手にした。

「今、不名誉なものを貰った気がするけど気にせず森の奥に進むぞ！」

シャーユは途中モンスターに遭遇しても逃げまくり森の奥に進む。そして一つのボロ小屋にたどり着いた。

「よっしゃー！絶体、大魔法使いがいるよね、この小屋！」

魔物や盗賊がいそうだな……この小屋。
だがアホのシャーユは警戒もせず小屋に入っていく……そしてシャーユの旅は終わ……

「らないよ!？」

「ひとんちでうるせーなオメーは!」

シャーユがなんか地の文に反応して大声を出すと小屋に住んでた奴がシャーユに文句を言った。
確かにシャーユはうるせえな。

「……なんか想像してたのと違う……。」

シャーユは小屋に住んでる男を見て自分の想像の大魔法使い像と違ったので落胆した。

現実はそのもんだよ。

とりあえず小屋に住んでる奴の特徴を表すなら顔はブサ……面白い顔をしていて、髪型はタケノコ……いや、ユニークな髪型をしている。

「髪型は言い切ってるよね!？」

テメーまで反応してくんなよタケノコヘアーが。

「あんた本当に大魔法使い?」

シャーユは疑わしき目でタケノコにそう聞く。
ぶっちゃけこいつ大魔法使いなわけねーじゃん。
だってタケノコだよ？

「ふっふっふっ……………大魔法使いさ、俺……………の師匠が。」

「無駄足だったな、さっさと森から出よ。」

シャーユはタケノコが大魔法使いじゃないと完全にわかると森から
さっさと出ようとする。

しかしタケノコはシャーユを引き止める。

「ちょっと…待てよ…久しぶりのお客さんだからもっと話そうよ。」

「うわっ！うぜーなコイツ……………」

タケノコは話し相手がほしいがためにシャーユを引き止めるがシャ
ーユはめちゃくちゃうざそうにする。

……………あつ、シャーユが剣に手をかけた。

「あんましつけーと真っ二つにすんぞ！」

「真っ二つは勘弁です！」

タケノコはシャーユの真っ二つ宣言を拒否した。

真つ二つにはそりゃ誰もなりたくないよな……………。

「俺、こう見えて凄い魔法使えんのよ？」

「じゃー、見せろや。」

タケノコの凄い魔法使えるぜ発言にシャーユは冷めた態度をとる。
使えそうにないしなこいつ……………。

「じゃあいくぞ……………シャックー！」

「……………何も起き……………ひゃつく……………!？」

何も起きないと思ったら急にシャーユはしゃつくりを شدした。
しゃつくりを شدしたシャーユを見てタケノコは不適に笑う。

「ふっふっふっ……………どうだシャックの威力は！」

「シャックつて……………ひゃつく……………しゃつくりをさせる……………ひゃつく……………魔……………ひゃつく法か……………ひゃつく……………よ。。。」

シャーユはしゃつくりのせいでまともに喋れないようだ。
しゃつくりつて地味にくるよな……………。

「しゃっくりをするせいで相手はまともに喋れなくなる。…凄い魔法だろシャックは！」

いや、くだらねえよ。

「ひゃっく…おい…ひゃっく、ひゃっく…しゃっくりを…ひゃっく…止め…ひゃっく、ひゃっく、ひゃっく。」

「なんか苦しそうだな…わかったぜ。シャック解除！」

そうタケノコが言うとシャーユのしゃっくりはピタリと止まった。

「確かに地味にくるわシャック。…まあ、こんな奴でもないよりはましかな。…よしあんた仲間になりなさいタケノコ！」

「俺、タケノコっていう名前じゃないからね！？ポコ＝マギマっていうちゃんとした名前があるからね！？」

「じゃあ、ポコ。私と一緒に魔王を倒しに行こうか！」

「魔王退治！？……お前、今の魔王は昔とは違…」

「さあ行いっしょ！」

ポコはシャーユに何か言おうとするがシャーユはポコの言葉を無視してポコを引きずり旅を続ける事にした。

「話聞けよー！？」

ポコの叫びが虚しくこだましたのは言うまでもなかった……。

シヨボい魔法使いポコが仲間になった！

だいいちわ まほうつかいがなかまになった（後書き）

超ヘタレ勇者

逃げまくりダンジョンを突破しようとするダメ勇者にふさわしい称号。

はっきり言って不名誉な称号です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583z/>

別に何も始まらない冒険

2011年12月28日01時53分発行